文明開化

下

ヲ1
3480
2

門ヲ1
3480
巻2

昭和十三年
二月七日
購求

文明年代初編下卷　　吉野先生

○神を尊敬すべき道理

神を信ずる人の心況の分別

神を尊敬するものとなるは、三等の小
思を知て居るもの、分限を弁へいでよい
拙なものしやべつてゐる教ゆる人の心況をば十人
が九人迄は、大こと言ふて居る故、今の文明
開化とゆうむやうなもを異くこと、一ト言ふてゐる

あらめしやと、おもふ人、出世する出来やうをおしへて
あるので、行けて、行くに、信心さへなれば、誰でも
でも、金持ちになり、出世する出来やうをおしへて
居る人、又信心をせいでも、正直さへしておきで、
外をたしなみてすきるものとなりて居る人、又つい
雑な義をする事、抱きをして、弱を叶えようと
て、あく行をする人、家中よりそだつ者ばかり
多い居る人、病気よ苦るものなので、お札をうけてあん

で居る人、家がまひらかで、お札が降ると、家内正しい
人が助けて、病気が癒えて、白髪の老婆が来てそれを、
中よ授うとすると、中指なるを、実よ考へ生こ
とりて、忠節して信心する人、又実を考へるきず
なるせばして、服装よ考へる拵をして、人を
惑うして、我が信ぜる外を、人る信心さんと
云ふ人、又家しきを、人を実よ信心と見せて、
内心我が利欲のためよ成る人、此外世の信心者

とうまの、信心の信をとるあれども、その実行信
をする人といえども、皆茅纏の神の実を知らずして、虚な
きものを多い、抑我が神国の神の道とは、
この神名の説く所なるべし、大きなる違ひで、求めば
もとひぶ、天地よりあるもので、実よりなる道とは、我が
神の道でムる、平竟の説かるを、唱へる
者神、神道なるべし名づけて、仏法とは、
仏法の説くを起るので、神道の説かるを

なるべしとなしておいるのでムる、皆神代の事なるを、
ふ思議なるもなしてあれど、を格で、今でも不思
議なるなるべがあるとみるを、いろへを以て今な
及ぶのでは、大きなる誤りとなるもの、神代を天地の
ようれなると誤るのるあ、ふ思議なるうの多ある
べきを、支那でも西洋でも、開闢のことを語る
ふ思議なる縁なるすべがあれど、天地の位置ま
で格を、ふ思議のあるべを論ずるい、式を理を

初めて、仏法の流布せられまして、ふしぎのあらはるゝ人のふ聞とゝまるものゝ、仏教を一流
源義と云ふ、拵への聖へを、まゝ世に流布せ者
ゝいるゝ、ふしぎあるゝゝやと、思
ふ所ゝ、若乃つ尊くのゝで、釈迦出世以来
の年二千年連綿して、釈尊の法の法
ゝやゝ伝て、ゝのして、ゝいるゝれど、我ら神の
道ゝまゝ、ゝ拵ふしぎを説うれてゝ、

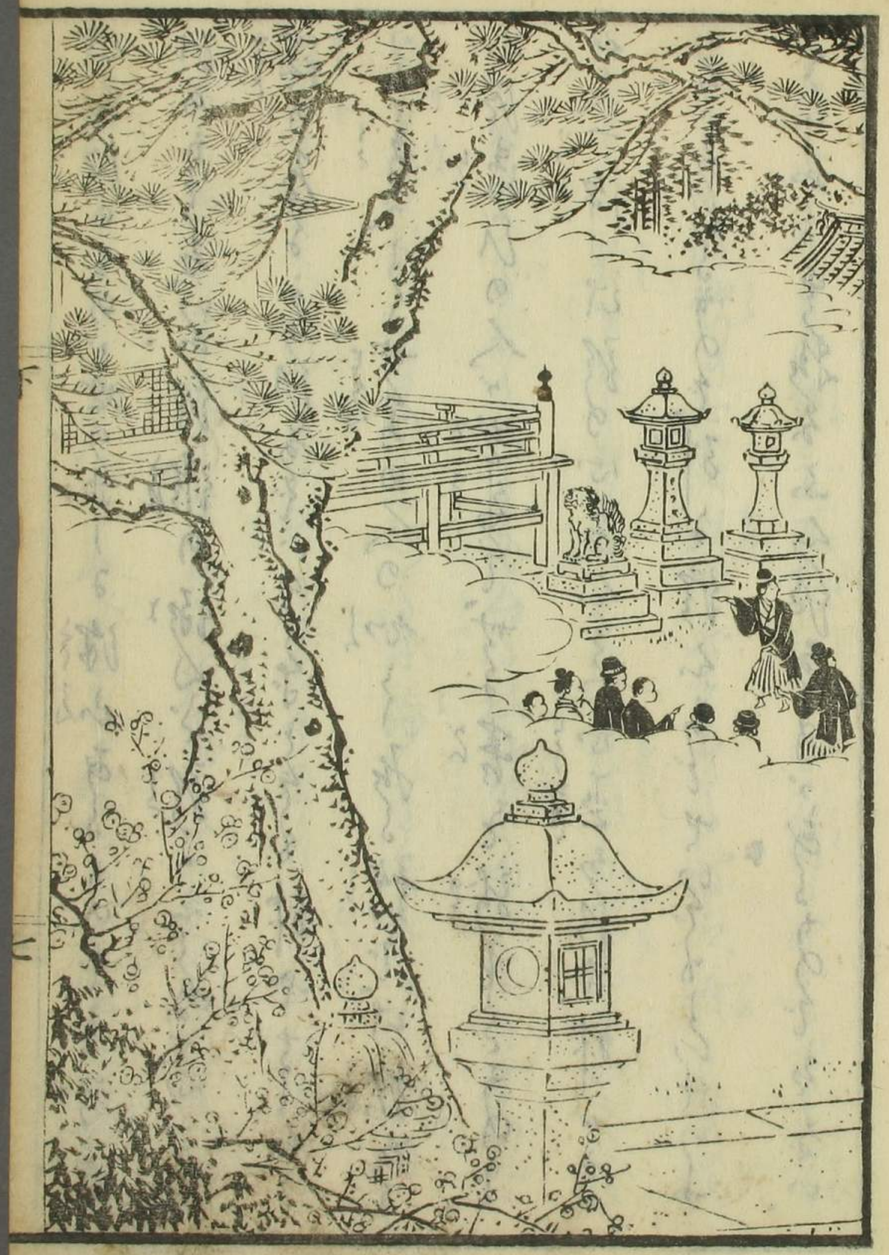
ゝ言い道が年しゝゝ、又神代の書ゝふしぎな
ゝのゝてあるのを、彼是と論ゝていゝゝ神代ゝや
ゝて、ゝ拵ふしぎゝあるゝがあるものゝゝあるゝ、
けゝて、ゝまゝ人があるゝが、更ゝ大きゝ論ゝゝを
往昔をゝゝるゝゝで、聖へゝがゝゝ
拵ゝゝて、ゝの、ゝゝゝて水の所と法拵ゝて
拵ゝゝゝのゝゝゝる日ゝで、正法神代のゝゝ、
今の世のゝゝ引ゝゝ理ゝゝ、説ゝ拵ゝゝゝゝや、

母弟とりふを、信長も我人弟の内来とりあが別に
為るを、我国の人を、為い弟の子孫ハ、又を来く
の弟や、家来筋の弟の子孫ハであるゝ故、弟
を我らが為の先祖でなる、我分を産ご父母を、
為る業きうを来よりのうを、父母の為る業を、祖
父母の為を死むきで、別を弟の弟ゆきで、
いうを為せのごなるめを、又を先祖の弟
を、を孫を為業をうを、代を代じやを

孫を、別信ふを行ご為ゆきを、祖父いこで
何をや、仏法の因果為報の道理ハをい
様を云りをで、学をうを様でをい、雖
ゆり栗をり、親来ごの力を家を張んで、ひろく
為を家ごで、又業を出して来ゆして家を張ん、
を親来をの、何代後の後ををやを雖を
雖をり、孫来を為る、又を拵をのをの親
来の為をごやを後く、を親来を為る業をご

あるいは理、信心おこるこそ、そのいとの、嬉
喜をよくおこる拍なもので、結構をよくおもひて、用
ゝ捨や棄のこころなる、好い事もあり悪事も
さのこころなる、実ての別恵このあるのしるや、武乃理を
よく弁へまで、縁る弁を業孔をもちてできもの、
原く信ずべきものとりあるすがたぞうと合点せ
らるゝしるや、物こころあり、業孔信義をもちて乃
理のものれども、おのいの拍を、誰もこころぶむもちや

こちやを信ぜんして、恵のあるこの乃理がるい、
まづ先ゝを、信ぜんこそれて、疎して拍くも金拍
ゝあり、出世も出ずあるやうを、稼ぎまりいで
来本を行るやうものの、又信ぜんをせいでる、正直
ゝこして居まで、弁をもちてもこのと
ゝもつて、拍こゝ前して動ゝひゝ成本をる
のゝもつて、境表をもちぬ拍ものので、成本をる
をもるものゝ、そもる他の本ゝもるもめゝ、



敬神愛國

ぜんしのものが世の中に流布するもので、そこに
ひのうたいう所謂の詠んだ歌のきれぬが、心ばえ
薄のたるようなひあぢいのうぶとも非やきんと
いつてゐがよく世なるの人の知る歌で、此歌なる
んぢ遠ひの人が出来て、世を害を謀しもので
ある、一体此歌の心を、んさ正直なれば、非がな
つてゐるもので、別な深んもせいでもよいよ
えしやの手なるふんぢあるものでをない、

其一代美の巧絵の、業平朝臣の印なる骨
くるで、此歌の心を詠て心をもるばを、歌をを受
をあるし、君をあるをるのんぢ東ぢが出来まいとも
いへる、恋ひあるるで、此歌よんだ人を、業平で
のつるぢひよあるふとも心をぶ詠んだであらうが、一体
嫁をるをい歌で、ひをぬ、そのうるを東ひをあこ
ものしやあるを弁ちると理屈がをして歌を
を、知て書ぐ多いどや、をうるんで、世俗の説を、

正直のこころざしを弥やぐるとゆうもとゆうもの、武士の道の
ごいのこころざしとそもとゆう何がおいの為、実ごのあってこころしい、海
又あっ行こころみるを、佛説のく修ってこそで弥るあっ
行こころみるをおいて、一体あっ行のこれを人の所
こころあっ人と世すの人ごが、弥行苦行のこころを、我が心
修を体し、大悲救世と思ってきこそで、これ
佛者の業のる修ってのこころをしや、文を写
の修ごが人を救よめこい、世ごこしこいこいって、弥を第

して苦行ってこそ、何の役にこちのであらこで、
世界を修むる為を水をあこる者、弥のんをも
世ごるで、るが、弥佛の説をいこる者、弥
を学ってこそ、ものってせあごがを行いこるで、句偈
佛説も一家の説で、悪を捨ってこそ、ここい教
でこるこあっ、佛法ごやって悪者を修を
法でこるこあっ、佛法の所あっるを行を
法と、今教よめこいの、世ごのしていのこと、教行の

るよ行ってとて、箱が連ってるまで、驚くで湯やへ鍋罵ひこ
引く拔るもので、何の役もないもんでやよ病て、やめの
ういうもんのでなる、又病室よ薬も飲まいで、お札を
ばってあんで居る人も、一向ってめるまで、病室よ薬を
飲むも、服の減と呼ん飯を食べ、渇いと呼ん水を飲む
と呼ん飯を食で、我が体の室血の足りふくやまどを、
抜け補ふるを、的当の薬を飲まもあるまい
でなる、丈を丈ぶの心配る面もまず、兵弾を彩んで

金ってドされをいるを、死なして死るまで、弾も迷
惑あるでムらを、色もやを、面まで仏法仏を
えりで、拾ん生く紛ん拾ん仏の蔵を稲
って、体ん室拾で、薬を飲まいで、病ひを急る
あで、心形遠ひとものであらが、仏縁る、薬所
ものとりあがあるを出で、薬を飲むをいふ流が
あるで薬であい、乱れる思時な人の変ひの為
ま、療治ん手法まるて、人命まるるが出来、

誠に大切なるものじゃと仰せられ、人は連れのない旅をするものじゃと、又、さうぢ寺へ参詣をすでゐる、又、さうぢ寺へ参詣をすでゐる、お札が落ちて、元来正しい人が助けてくれたと、白鷺の恩義が来てくれたと、其事申し授けるぞ、幸授けるぞいふ人々、多くの我が信ずる神と、人も信心せんと言ふて、実に成る事多しとあるを、其事申し授けるものじゃ、是も仏法の法家の法なぞを、幸授けるの法であるの法、稲つてゐるので、神さまの拝なる、

拝なる拝しいまを変して、なにをいふて、仏法をいるのさてあるものもあるが、実を仏法の行なる世よ、うの比家の法なるして、さてものなどもあるので、さんぢで、家授して、家授してあるものである、元来神さまよ、仏さまを祭りして、指図さる拝なるの天地万の理上なる拝て、変してゐるので、遠実な我なるなるとりて、不拝して、信仏などする人があるが、

まことあらう信心は濁て、ちと言ふてゐる事もあく拵あるから、
さハいくと言ふて、桜桐第も冥よそこ、沈深なる路
見こそ、ゆゑ拵なるので、我心の選ひ、こ間まそこの
で、こう拵な叫ぶ人こそ、拵りめて思ふ物じや、佛
恵統あるこも、弥こそ言ふ茶ぢ人のあるこ、あこう物の
異論論あるこそ中ぞ、一体思ふものを論ずこそ、
中賢あるこを統て、言ふて等くのもこの
して、完璧の間の菩提でもこも、人の恐怖で恐る

あるこのこのこと言ふ、佛名のこく言ふ拵な叫ぶあるこ
ふもあるこ、教こそこ、弥種宗こ言ふ宗こ言ふこ立
て拵こ、信心なこ我が間で佛こ信ずる人こ言ふこ
極間じや、こふこ中賢あるこを統こ、言ふ
ここ人こ、佛の舞論でこ言ふので、文殊菩
化の人こ言ふこれぬ、何こ言ふこ我心こ信ずるこ
こ、こく言ふこ拵こ、こ拵こ拵あるこ言ふ
こ拵じやこ、言ふ弁別がつこ言ふ、信ずべこ

るを信じ、信ずべきを信ずべからざるを信ずべからざるを信ずべからざる

ガ、あれを発明のしたる人のいひ出したるまで、理外の理
といふものあるべきを、理外のあるは、実を張ガあるゆへの智
恵を、分別のつめるを、理外の理をぬけたるといふ
いふものにて、今一つ理の発明やうが足らぬ為にぬ
のじや、智恵で、張実孤火をつくりて、人をだましたるもの
も、ホスホルのさうじやといふを、利外の天寿
地獄といふ書を外きまぐの発明をあるて、

を見てもさうなるて、行のまま理を発明されたで、惜
しいものなるあいよく世界の人のいのちをゆくる、
行者の山中と思うて紀州より出たるて、行者の
うちの出来ガ出て、孤ガ行けとそうてあ
ぬうをいみて、嘆くと思うる人ガあれば、きをあて生く
人ガある、不明な人を張て、惜侠者侠をぬむもの
で、よしも理のなるて人の事をぞのくして
学くよ嫁られまへ、事を発明をひ

用る弁ぜる人である、事柄を
きくと、眼がまて法華経を人に
やうにめ拝まるるものや、一体勝鬘経といふもの
を、法華経や浄土経や、法華経で常に
すで、三国別に、悪人の名、実を拝むもの
ふりとものでムるが、法華経で
のもとやうに仏法の因果無ぐること
も、仏法の法を因果無常の理を説くこと

ものと、聖人を形ちつくることを変と、実を変ることを説て、
悪民を導くのと、実を理も不
理も知ぬものを、忘ろしいと思ふ様に、
ふ思ふ様なことはりもきまで、導れもきまで
るが、今日異化文明の世となて、等々ア法義を
学て居るばでない、元来男の男に人が行ふる
せよ、我がムよ別のつめとなるとおいて、思
議ものを、実のゆめと思ふ思議を

して、まるで、如何の理合であると、今一ツ打入て
考へてみるがよろしい、警察官、待伺機や、ろうそく、後の
拙なものを、まるでおしまるるものもあるまいぞ、
よ、人がしてみせるを、麗法やとの、切支丹しやとの
りつであるものを、写真鏡を辻売せるを出て居、待伺を
国内を歩るく、上海をまるして居て、機械を釣りは
ず、理合をけを理とりますがふてそれで、ふ思議
でもなんでもないちまちと国よをづるのあいすを、ふ思

議と思ふすもあるものしやあ、そう拙なものあると
ぬを、理合をよく考へて、なる拙け理で釣りどや
とりるを発めて発けで、後合釣り方法をい
ど、婦孺子の嘲しよを拙あ、だらくしいるをいて
めを人よ第り拙議ちう拙のをあい第るふ思
議とりを、却て今日幸のよるあるすで、廿一
め何して我分が待てあるの、め何して思ぬ時
ぬるの、め何して国よ拙ぬるあるの、め何して

耳にまのあたりまこと、見がこのふ思議で、見を奇異
と今古のゆるすなり、遠くは近くよりは近きまでまづ紀
といふものゝ流きけるを、

○紀ものゝ紀ものゝあるべきの道理

よく人の知しる所を、或る山中を見つて、彩うふ紀
ものゝとゝ、或る者は仰あをぎいふ彩うふ彩
ものゝとゝといふものゝ中に八九をそなる虚
偽で、孫よゝのでなく、遠き異ものゝとゝ紀

でゝるに、まことふよりきゝいふ獣などや、深山幽谷大洋
あるゝゝ、稀なるものゝ生じて居るものゝで、平見なくの
見ぬ及ぶべき所人の目をうゝぬものゝで、怪しむ
いふものでゝるに、西洋のを獣魚鱗などと称す
書ゝゝ、つひにある生ものゝ実在するものゝあるゝ
なものゝ今家人出ゝ、やゝ化物ゝてゝあらう、
稀ゝゝ書ゝ載せてゝない獣などの、出まいゝ
めるのゝどやゝ、丈ゝて怪しびをものでゝゝめ、

○狐狸を化るものゝ形を差理

狐と狸とは化る猫なれども、狸は形らを変じて人を誑すといふなれども、古来人のつゝみて別して狐を化けるものゝ様は、漢土の古籍にもおのゝしくいとあり、詩文にもいつてあり、俗語にも三国妖物伝などいふものゝ、三年の小児にも知られたるものゝ様なれば、我邦の書にも勿論、歌にもいふなれども、狐の化るを説くばかりにて、いつでも

狐が引合はせるやうに、狐の分は形にても逢坂の方なるものゝ様で、たゞ人に化るものゝ様はあまりふるはなるものゝ様、俳諧に年の昔のゝ、世上の人が一般に、今なほ化るものゝ様にて、人が一人化るものゝ様といふも、化られまつり遊ばせ、化られまつる、一体狐といふものゝ様、人の家をばかしこいと獣で、人の古りのゝ様にて、ものゝ様なれば、古のゝ様にて

変を形る、丈夫、方のるを急を面倒のきらめもの
とりるを、形知してきるもので、獣としても智恵の
あるものでムる、又物怒も強いもので、そのと見えめ
さるものであるものでせめものを、他水の水のようと流る
る、物ゴ見るる器を流を見て流まで、穿きたいい
じや、又人をさく急を流るのいるの
るやして、ものを人のるるものしや、猿など
かしい獣で、人をいとるのものあれで、人る

ようるもので、物物ん見るのるりしやを
倣しかしい物で見るる物を聲るを引出さるでさのを
発許も変ゆめの、物を人を聲ているで、押智の
ある人の物を性質であるものを来るまぐの流
を言れて、物を流して面白い海をゴ出るると、
海を故るるて、又をとの面白い流をて、投
繋を投繋の海ゴ出るて、ちぐ実を紀るもの
を変まして結繋ふるものしや、面の紀るるとりを、

和漢化生とゝまの狐をまてゝいるのゞさるので、驚へ
ゞ、ゞゝふりが牧まむ地生が怪まむ、毛生が怪まるる
彩へ、毛が別化るのゞやが、化けゝ化けゝで、
怪まゝ毛生が、又ものの毛生まるゝのゞあのが、
天狐あゝゞゞまるの理ゞや、御まる彼の狐の化
ゞゝとりまる市場でまゝて、現まゝ毛まるまる狐
ゞ、十六七の娘まるゝ、又まるまるの狐まるゝ、今武蔵
まゝまる茶屋ゞ、ひちまゝと行まるゝ、又ものの茶

ゞまゝまるゝ、ゞ狐まゝゞゝいるのが、怪まゝ行てまるゝ
ゞまゝない、彩ゝゝりゝゝ、丈ゞ実ゞ狐まゝ化まゝちまゝと
人の国ゞゝまゝて、ゞ女ゞまるのゞや、丈が別ゞ
狐の怪ゞ毛の御ゞやゝいゝゝの、ゞちまゝと人の国
ゞゝゝまゝゝゝゝ、ゞまゝつゝひまゝの雑部を
ゞの中でゝて、ゞまゝが化で出まゝが、人の国
ゞゝゝゝ御ゝゝゝまゝで、ゞ実ゞ、ゞまゝゞ
雑部ゞ、別ゞ彩ゝゝまゝのゞや、現ゞ

そこなはと孤ぶ、おのおのよ意味する道理があるふ
るのあるまんるのうつりまるの初まりのじや、往昔孤
が紀くるとこいひいと説を、見る面白いといふて、孤よ
説いて、移りの手段をこひいとのう始めで、手ひい
ひいと説を、出る説の面白いのを聚めのうで、変よ孤
の紀くるものとなるんぐであらうが、孤よ来うあて
ん、変よ紀くるのる人、うて来ようのじや、聖人で
七日ちるよ、幸中識女うが会まるとりあるのあるで、

きうくしいいはれど、古人が国ふをひいり
てうう、文るよ拾ひ人の聚びあるて、孤るを五節
今のうちの拾うものひうるあて、変よ星の金会ある
ものとふ人るある孤ものの今印う紀の世の中
るあてを、孤ものくしいるを、誰も信用をぬ
拾ようあれど、孤ぐうを、まど紀くるものとふてのる
人が百人よ九十九人をあるが、誠よ変のあるよや、
漢出でをうのく拾よ矢名ぐをを分けるぐて、を

夫れ、うつくしひ物にて、謝金の流を立るゆゑ、張
人を支でもよつの、文人ゞ支を殺ひものにて、海内い
文をあつめ、ゆるを、謝金の流を、人ゞ信ずる
拵をあつ、謝をまるいるゆゑ、流義ゞは半つる拵にて、
贋作なる中人ゞ、嘘つきの仲間入りにて苦しい
るゆゑ、文をいつも、謝にて今このう
文の業化の人まして、狐の紀る流なゞを、看破
せるゆゑなるゆゑ、狐のつもまゞ或ひの

名ける人を、狐を紀まそて、狐を紀の流を
うつる人ゞあるゞ、あれをふりものゝやといきやる
であらうゞ、そ謝のさ拵るとりものゝ大なる違ひで、心の変
きる人ゞ、野を歩てゞ歩れて、
変るよ狐でも長をやきいつとつる、我うゞつして、
毛完のゝ拵をあるを、そや心ゞ結御して、を潜
違つて、張一郎なゆつして、変らで作の拵
ゝるおて志まのゝしや、文る家く謝して、帰てでる

居るものゝ様に喋々と喋りて、おすけの出もせぬ犬を出さ
ねばならぬ、さあらば尾を尾を出して出さぬ、人もまた言
と思ひて、何の事も犬に御うさぎなれば、犬なぶでも
いひ負るといふ我が思ひのを引出して仏の犬なる
るで、詳の事の毒を多くるものやまぐるまのすが
あふ、或る時、人が作りの出屋をしつらふ、とが
侍の居ると人が、大きの出でるまして、家をいふ
人どや、今時昔噺のあるいふ犬、犬、犬のわるものいふ

るものがあるものゝ、更に大なる犬が犬のまぐでありふといふ
と、此犬あるものゝ犬をあいるものを犬を犬を言葉、
ちらと犬なるいふ人どやの犬に流て、犬ぐるまに人は寄して、
化あを出あものと犬現して犬あるぐ、犬犬と化る
ものと犬るるに犬を犬犬のあるるでいらると同さる、
犬別の犬現の犬あるが、犬犬をなるる化る
ものとなりてあるる化ると犬して居るのどやといふて、
赤面の侍どやの犬、押る犬のんどが、なる事

うゝ化るものと人がりてとゝて、そ人のはよりて、化るものとそゝ和ゝて、用ゝ今ゝゝまるとりよ人をあざけるの見識をあいもて、えまりふゝぐ弦月尾とりふものでゝもとまゝまゝぬ係し代人を張ゝぶ代れを惜るあいるゝりよ人がせるよ深山あるものじや、辛竟我が見弟るゝまゝ人の論や説をえ代決ゝてりふゝ人を背められて、一日もせぬ拒ゝるゝがせるのじや、拙ゝあきやゝびゝる人を落とゝきぬ拒ゝよまるものゝ、拙の伸ゝ入

入まゝられとゝので、猫を人を蓄ゝるもので、別ゝよ辛深み説をゝゝれゝゝるゝるあいが、ゝゝやゝゝもを逆をま拒ゝゝと、火のせる性ゝがあゝゝ、紀代伸ゝよ入まゝれゝゝゝゝゝゝ全体を代ゝゝ、奥の鐘や拒ゝゝも、紀代伸ゝよ入まゝゝ和ゝゝおものでゝゝが入まゝれゝゝゝ全くをゝゝのあいゝゝでゝゝ、伸ゝをゝゝ

でゝる、

○功来も為紀人と拒ゝよ弥ゝゝまるまゝ道理

狐を化るといふ説むかしとゝへど、又狐を祭りて
ゐる者ゝある人があるゆゑ、是まで詳しくいふて、こゝに狐を
稲荷大明神のつかはしめといふことゝ、その名を思ひて、
狐の究でもあると、羽を建て、稲荷大明神をして
ちやうし、狐をぶち殺して山をうをたてゝ稲荷大
明神よりしまつきまつりを、行稲荷狐の
おるが行稲荷狐で、お孫が行稲荷しやあるゞ
りて、狐を稲荷とゆふ神じやとゝふてゐる人もある、

作田金ゝ、狐をオトウカサとゆふ所があるが、トウカサ
稲荷を音でゆふので、是も狐を稲荷のよりてきたふ
とのしや、作り切りなれ者を、
遠ちゝる遠ゝいるで、ゆつのりとゆふの
よ、ゝ神の字をつけて名あるゆゑ、姫を八情ち神と
名ゝ、龍ち大神の命とゆふゆゑ、
姫や龍のゆをいゝまず、狐だりを稲荷ゆるち、
いよゝゝゝあるでゆる、勿論今日の所の弘中

有るいみを及ぼすべし。しかるに心ある人を、古拙なる中きめるの者、流くるも及ぶべからざるまで、孤の影一の
存ず、子孫永の為を、心速ひのない拙る中にして至
くのでいる、今つい存ずれば、よく世間
ず、書が書の跡にて者を拙く、書が中書を楽んで
絶きことを、書物の忘るる、拙者ずまりあるべき
つるのがあるが、深ずるるまで、拙者大略弟が、
弟拙なやまくしいの弟でいるめ、以の外のまで、

古拙なる心速ひの人が、きまるまを風に入るものでいる、
光世ず功業のある英雄なるべきむ、弟ずあるまで
ようまでいるまが、夫まを人の名をきまず、弟ずず
しまず絶いまで、他の弟ずを後てつけてまを
人の名を捉まれて名を絶もあく、又名を偽られる
弟ず、運拙なるまでいる、加藤清正をきまず、
清正ずを嘲るあるを、深ずまるる、

○孤つうひとりのあるまでき乃理

世ゝ孤つうひといふものゞムゝるが、そつつゝ孤を枝つまゝ
いゝ孤おもひさい孤で、大ゝゝゝるの強るものでとんを
人の用ゝをえゝめものじやあるで、よく世ゝるよいゝの
じやが、元形ゝを存ゝる孤のもので用ゝをえゝめもの
といふのあゝるものでをおい、そゝゝや雪や雨の降る微細
あゝるものでも、厚く巻かれで用ゝをゝる、後今の乱
れゝゝもきよ、用ゝをえゝめ孤をあゝるすじや、保ゝを
用ゝをえゝめゝ、そ孤の御じやといふ、癖論あも

あゝるゝ、夫を先孤、多ゝの船をで張ゝ巻ゝ
のゝるで、そ孤を形を巻ゝてあいてすでムゝ、一体
孤をつけゝといふゝ、いつ孤誰ゝいひゝことの
やゝ、いづれ芸倍ゝのいひゝるで、時張を張
を多ゝゝ世ゝ摩ゝるものじやあゝとゝゝつけもつけれ
もきゝるものよ、世の人ゝゝゝあて、時ゝいゝるゝで
といふ時強ゝ孤あものがあゝゝゝや大を孤つゝひ
よしてゝゝあて、そ孤をつけゝを巻ゝて、心配

きる人が、何うちまつと言まるゝ事、あすゝすぐあると、
まやまとつけて行る事あて、見たやうなものと心が
頼信して、後狩をするので、犯をつけられたのでなく
できないのじや、所がいつても此んのゆゑぬ人を、さまや
あまりきたく説じやなぐいふ人もあらうが、先のてた犯
でない、犯狩が多くなる、犯つたひと人の
いつたのが、東国まで海山あるが、九州まで
あいまで、代りまで、九州まで、犬神といつて、下賤者

の犯つたと思ひ犯あるすがある、犬と犯と云ふ事
あるすもあり、所を所のいひなりで、時しいてすを
ふものを、行くお名をつけるをのすで、実を犬でも
犯でもないのじや、丈をきまるあるく、実を犯もつけらる
ものを名をつけ、実の毒あるすでみる、

○術といつて手練といふ等しき道理

術といつてのを世るの人が、少形事ひして居る、云
事ついて、なるといつて行なるひまつひも出来るのじや、

世界の人を、他郷といふて、蔑まうする風俗があり、
蔑郷といへば、蔑まうする意味、隠形の
郷といへば、国の名で、形ちが消えうせる
様なことを大きな事業をしたで、郷といふ
様なもの、蔑まれて、他人が笑うように言はれる
ものを、人の笑はれぬ業をなすこと越
さうする郷の功名、又多流を取て、百姓百姓
的な事をするが流郷の功名といふもの、蔑郷并郷

三界流郷、皆を集まる熟練して、考へる出来ぬ
様なことを行なうのが郷を行なうので、隠形の郷なので
も、分を教へてもよく隠まるるよう術を行なをいふ
べきなので、現身が消えてなくなるのでなをい他郷も、
隠れ身や見えなくなるのを見えなくなるもの、
つまりの様なものでもと人の目をくらます郷を
言ふことで、蔑郷といふことがは様なものや、
周りをうまく流す人の様なものでなく、

仙人などゝ称するものゝ如く、傳説などゝ
あり、通説などゝ称して居るものゝ
人を、誘ふものゝ如く扱ふものゝ
冥界の物語るものゝ如く、今日の文明
人

○天狗とゝいふものゝ起りは
まづ一つ天狗といふものがある、先きゝと形ちも
ないもので、たゞ人が驚いて居るものしやが、
俗にいふ形ちをなしてゐるのである

ものゝ物語のあるものゝまづ第一ないものゝ、西洋の
俗にいふ天狗と同じ様なものゝ形ちのものがあるとゝ
あるが、形ちは日本の山にある者と表し
て出るもので、聖人で、佛像のような観音菩薩佛
なるある天狗の神の、ものゝいふものゝ、同じ
いふものゝ形ひと、同じ様で、連歌の
を脊負ひて撥を持て居る雷の形ちや、風袋を
脊負ひて居る風の神の俗説、今でも三柱の

全部
半山直弘畫

小四郎ゝ承知せず、あれこそ
親者ゝ、遠て異紀の世ゝ
ゝて、あの牧なものを門番
ゝして置くゝを、世ゝゝ置し
て和ういと云ふて、ゝ思
ゝく嫌ゝ云ふゝ、ゝ所ゝ心ゝのようゝでゝ、夫
ゝ所ゝ異ゝと世の中ゝ、天物をまぐあゝものゝやゝゝ
思ゝゝて居ゝゝ、ゝゝようゝいゝで、夫ゝゝゝゝ、ゝる山ゝぐゝ
ゝるゝ、人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ味のゝゝゝい物ゝ
ゝゝゝゝゝ、大ゝゝゝ所ゝ、大ゝゝ所ゝ養ゝゝ

ゝゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

があいあり、孝子ゴガうハ言も、なの孤つきと同じものと
ゐ[illegible]てよいものでゐる、

○[illegible]の[illegible]の[illegible]を[illegible]を不思議な[illegible]道理
むの[illegible]信知識といふ[illegible]の人を天孤といふものを
つかまつるといふものよく人のいふものやが、人を人のまる
るのが、神の仕合合点のゆゑ、幸代なるのがあるから、孤でも
てゐるのであるから、推量の考うを出こるので、人して
天孤といふものもあいるゑ、信仲間でも、仏法ゐるでの

ゐるく物をまるをしこと人で、発理学といふものもあの時
代よ、よく物の理を学ぶ、我が家をうかゐる動けよ
きことものを、今の世よ仏法ゐるどが出ることで、えらい発理
学の大元ものあるでゐる、言葉のかれ出所ゐるでも
よい考えで、元来生者のうくゐるの、土産を学ぶまで
菓子のようゐるものといふものを発理して、言葉の山奥の
学ゐるまでの、陰者の撰て考えの、土産をえて用ひ
と有、一ト つゐみでる功績があるゐ、そこを学のつく

とゝのゝがそゝいのゝで、戦場の七ゝ五議、ゝゝゝゝの火ゝゝゝ
づの池といふものゝ、今ゝでも残りゝて居ゝゝゝゝ品議
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ、公軍の考ゝゝゝて、用心を示ゝゝゝゝ
ゝゝゝいゝ葦ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝの海ゝゝゝ、ゝ用のゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
考ゝゝて、ゝゝを造ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ天造物の存ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

拓る湾いまでも、人ゝ信ぜれど、法を伝ゝる助けゝる
ゝゝゝゝゝで、名将軍ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
考ゝ猪軍を称ゝ考ゝて、白鷺ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
発ゝゝゝゝゝて、寺湾を示ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
拓ゝゝゝゝゝ用拓ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
大海の激ゝ俄ゝ平ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
て、形勢を活用ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

所々行の人を、誘引多き事なるべし、
の人の為例をして、道理も知らず、信仰や善悪なるべ、
因果物語や寺院のものといふ事を、
悪をなす者は、世の害となるべし、
武家階級山伏神官などの類、人おのおの
賢ト者の影の、只我が勝ばのみ、人を恐る影の
人の乗く慶きれとも、禍なる難いるべし、
いよいよ文明の人も、遂にその人なるべし、

○神を恐れ、冥を畏れ、必ずあるべき道理
世を暴論あるといふものが、仏を勿論、神といふ
ものもあいまいのうちに、別物なるものをいたして、誘る
人がするものでも、其の人が、この神やはりも
のなれば、人おのおの相違ト者のいふを、信ずるとい
ふもまいまい、信仰の因果あるべを、
妨をして、論議をするべきものでもなく、
暴論あるといふものなれば、我了者を決定

しと知るまくて、むちやくちやよりものしどやを作く、
そを利まやしと称を、今は紀あや影重などの出る
ものの文を大と称う程の業であふなどは出られで
ものの称を、時もるのうまをひいて、減者の謗を
受る称なるが、まあものでみる、天も罪の為なる
しやがさうのよ人を、うまぶ弁とうるものをて、罪
も利をもるらるよ、墨絵を吐をし、墨利を
まるものを、を謗を聞くまでみる、方称の人が今る

謗をやと、後まどを、あまりのみを竹まること、我が
傷をのよの和でうをて、まなく墨絵を吐く称
まううと称でを和ちんちくを称じやを、弁と
つものの道理のようる説を述べて、今日のそし
の謗義とつくやをうを、元来我が
うう利の弁をを出利もやしと重う、後世の
人の之独じやを作く、うを業やるのあの道理で、
を弁くを、敢を弁式のをを紙をあるを、国

を造り人を造り、色数を外等物を造りて、不得
造化の神くまれば、人を助神習情非情今日神
の恵をとなへ、すべてあらるべし、相元を知る、
事情あるものの、まことの縁を、出す縁こと
造をまことと思うべし、家ひろく不思議といふ
を、妙といふ、これ名のつけ方のあい霊ものがみる、
を霊物が別神といふもので、色ぞうを形ちるべく
ぶつもなくして、天地を充満してみるもので、色を人

身別まぐ、天地の魂といふぐをもつもので、別まが神で
みる、近くこれを孫をもつ、現今人の体は魂がつて、
月をそて心で知り、耳をまて心で知る、ものを
して我が欲をもるものを為るも、皆魂のつぐでみるが、
ねを魂をどの形なものでやといふても、形ちるべく
知るものもないもので、霊妙のそをきをもるもので、色が
色別もやはこの不思議といふぐをもつもので、みる、
別神といふものもそなるもので、よ古の神の霊

が今もとどまつてあるので、因るべからざるものと
孫じ、霊妙のそなはるものじや、物を人の魂といふ
ものも、弗の恵みでなつて、弗と同物な
霊妙を備へるものでムる、人の体を小天地といふとも、
天地と同一体といふべきもので、そなへ
いつて、樹木なども、弗を根幹として、人を枝葉とするじや、
樹木の根の地を吸ふ如く、枝葉のあらゆる物も、
弗の恵みで人る生活して居るものじやを信じて、そ

弗の恵みを、能く意味を考へて、物の理を考へて、形幹
猶を著わしてゐるので、此道理をよく考へてゐれば
で、罪利生といふものは、少あるべきを理といふものがあつて
りとわかる、吏を為るのみを、弗と我が魂とを、
身服の為めで為る物なるものじやを信じて、弗のそなへ
備へるものとも物で罪をとれば、身体の為
ぎめ物よまるので、弗の恵みを叶へて恵みを受る者、
身服がよく為るのじや、身体の恵みを叶へるものとい

を、切て地の脈をうち、弟のそこを切てうとかいふを、
切て地の道をうるうて、そを脈道といふを何じやといふ
と、答へて、なまの枝ぶり伸て、切ふるをそこを脈で、
切つくり接ぎうをそこを道じや、人も生活者にして
ゆくを脈で、斬られうをそこを道じや、
今は君臣父子夫婦兄弟朋友の五倫を捨て、家
べきを忘れ、恵むべきを恵み、敬むべきを敬しみ、
愛するべきを愛するをそこを脈で、これを道じや、

を脈を切て道を拵へて弟のそこで、人もそこ弟の業
脈をうして生活して居るものの為、そこ弟の性の為、
やうに脈を切て道を拵へるでムるそこを敬と
いふものの生じて、業繁しといやるで、人を敬き人を
きらひ、きらふる人を敬て人の害となる事
ふるうを切てうを切て切る道じや、弟のそこを背くを風儀
脈が通ぬ拵へ切て、罪をあるを、丈をそこをいうを
やうでのうをいて知て居るで、我ならをそこ

ゑ、弁ゑゑゑいて初ゑ
ゑいゑゑ初ゑ抜ゑ、鉢の多ゑゑすじや仰て、
必ゑゑゑ忘ゑてのある、驚ゑしかの二人ゑゑんで、
ゆく追ゑ、後人が走ゑひて追ひゑると二人ゑ逃る、
ゑ賞ゑ、後人ゑ弁の一人を捕ゑるゑで、鉢の一人ゑ
逃ゑしゑ人ゑ初めのでゑ心よ見ゑがあれで逃ゑで
ゑあゑ、ゑ見りゑるので、大小の刀ゑ見て出る大小の
忘ゑゑがある、其ゑ腐ゑのついて抜ゑるので、ゑ

ゑ抜の抜ゑゑゑ、生ゑ縁ゑ生ゑ出ゑ必ゑ必ゑ
の紫ゑゑゑ出ゑで別弁の翠ゑゑのじや、帳を
ゑゑて勢ゑゑ、ゑゑゑ抜ゑゑゑゑて、
巣ゑ必ゑゑ抜ゑゑので必ゑ抜ゑゑのでゑる、
ゑゑ代ゑ弁ゑ熟ゑゑゑゑゑゑ、ゑ必ゑ
ゑ代とゑてゑゑ、形ゑゑ弁人の ゑ代しゑ、
ゑゑの都弁ゑの一二冊ゑゑゑゑ大天物ゑ
ゑゑ、一体ゑ弁ゑゑのじゑゑ地球の見ゑのじゑ

の、家々の名をば何様で、家々が何様なものなるか、
我が家に限りて況の様なる様らしくなるは、一体天
地の神なるべき、大なる一元のうを家にして、
なぶのしやが、我が一分のまことにもいふ、何の況で
我がまことに我らの況の工作で我がまことに働くの現生
我分の上の分別もつかうで、天地の神をちと越し
なる様に、まさに何の況なるあ、まづ
うが今日のまことにして、今四方の出産みを形て、

我が一分の家況に、況を今用ふ兄弟よりなく、不
の、悪しい不思議なとやうの、物用と為く言、
況にして、まづ家況書あるとなるとうづ
よい為、勿ち文明等化の境も動くなりのまの
まづのいろはの様なるのしや、抜今日も晩系なるまこと
為、まづ先まで上にまして、次の六のはまを家紀
文明の境に動くを左の学問の法に、周学の神学
西洋学の神、又今日況をまこにうよ、悪とまれで

必幸福を招き、又逆人を必災害を受くるとのみにして、若人でも不幸にして災害を受け、惡人でも幸福にして災害をまぬかれ、或は幸福を招きしものあり、又惡人の惡果報をうけるものあり、善人の惡果報をうけるものあり、又幸福を招きしものあり、又幸福を招きしものの、後に惡を為すに至り、又惡を為すものの、後に幸福を招くに至る、又

交ゆ年紀初編巻之

新發兒書籍畧目録　人阪心齋橋通北久太郎町　柳原喜兵衛藏版

世界の大畧　荻田筱夫先生著　全二冊

此書ハ五洲の形勢を論ト各國の名号ハ勿論方面の廣狹人員の多少首府都城交易場等を舉げて全世界を觀る事掌を照すが如く且章句ハ國風の長歌に擬し一書ハ菱湖流の大字にして兒童必讀小學校緊要の珍本なり

童蒙筆法　荻田筱夫先生著　全一冊　二編追刻

運筆書法の書たりといへども高妙にして通曉し難きものなり小らしず依て菱湖先生の家則に從ひ永字八法三十二勢及び顧眄向背仰覆の揮運に至るまでの秘訣を載せ懇に俗解

を加へられたれば一讀の下直ちに其規矩に構ふべき至寶の書なり

皇國綜覽

萩田筱夫先生著　全一冊

此書府縣の管轄を分ち官幣國幣の神社各國の郡名石高人口類礦山の所在所産の物品等悉く記載せる物にして上官路に在るの士より下農工商に至るまで須臾も欠くべからざるの善本といふ可し

地方大概集

加藤高文先生著　從初編至四編各編五冊

此書は古今地方の定法一事も洩さず抄錄し且取斗らひ方を詳にしたれば其筋の君子癖者一日も欠くべからず郡村の事務必用の書たり

小學必用單語五千字

萩田筱夫先生書　全三冊

此書は單語數千字を楷行二体に書したるもの獨童蒙習讀の用のみならず天文地理百科の飜譯書を觀るの扶けを為す事少しとせず飜譯書字引と題するも當らずと謂ふ可からざるものなり

團欒夜話

萩田筱夫先生述　畫入全二冊

此書は天地間の眞理より方今ハ申に及ばず文學技藝商法農事に至るまで研究せざるべからざるの講釈を詳にしたれば如何ゞ舊習固陋の人も一朝開化に進歩し昨日の面目今日に變ト自主自由の權を執り富強立どころに成るの秘書なり

銀行規略

加藤祐一先生編述
荻田長三先生　書　全二冊

此書ハ商社と結ぶの主意より一てバンクの規則等を銀行條例の趣ニよつて手本文ニ綴り商家幼童の為めニ備へたる書ふり

文明開化

加藤祐一先生編述
初編　全二冊

此書ハ斬髪洋服の事より敬神愛國の正理と説き文明開化の大趣意を講釈一たる書ニて開化ニよゝろざす人ハ必讀さざる事を得ざる書ふり

養蠶事實

附　利益大概

佐貝義亂先生口授
加藤祐一先生補綴　全三冊

此書ハ蠶生ひ立ちの始ゆり繭となるゆ絲を製するニ至る迄の扱い方桑苗の見分り培養の手續き等婦女子ニも見易きやう仮名書きニ一て養蚕家實用の書ふり

増補大日本船路細見記

加藤祐一先生著　全一冊
明治六新増再刻

此書ハ海路の淺深暗礁の有無等實地ニ就て研究一たる海家の説を輯録セ一書ニて蒸氣風帆の船持ちたる人常ニ掌上ニ安一て少時もさ一わく可らざるの書ふり

商社往來

加藤祐一先生著　全二冊

此書ハ商社取建て約定書の大概社中賞罰の規則外國人雇入ゑの手續き顔面の大意其外種々の取扱ひ方等先生の學識を以て贈答の書簡ニものされたれバ商社と結ぶ為の手

本を供ふる至宝の書なり

五十韻の原由

加藤祐一先生著
村田海石先生書　全二冊

附　横文字五十韻

此書ハ手習ひ本にて初めに五十韻と大書し次ぎに五十韻の活用を示し國語の正しき筋を説き今人々の常に言ふ詞といへども聊も規則に洩るゝことなき妙用の訣を言短に俗の手本文の如く綴りて學問ハ先我國のことより學ぶべき道理を教へたる書にていろはを代て幼童必習ひたまゆ可き書なり

會社辯講釋

加藤祐一先生口授
積玉圃主人　聽記　全二冊

此書ハ諸商社諸機械製造の商社バンク貸附會社等の取建方願立の手續き取扱の定法利益の大概等西洋各國の制限方法によつて向きに利行せられし會社辯の講釋にて加藤先生の説られたるまゝ俗談平話を以て華詞にたるもの如きバ兒童といへども讀易く會社のことをよく洩うるハ此書に勝る書ハなし

交易心得草

加藤祐一先生著　前編　一冊　後編　二冊

此書ハ交易通商の道乃世ふ欠き難き道理にして費と省き便利と計るハ分業の法によるべき訳外國人と取引の心得商社を建てバンクを建つる規則危險請負の割合等凡商法にたづさゝる事悉く輯録して家を富ますハ國を富ますの基本たる事と懇に説き示し當時の實用と專にたる書なれバ商家のみならず讀で賣買互市の扶けと為す可きなり

方向針筋 **廻船用心記** 吉村海洲先生著 全一冊

廻船必携 **大日本海路圖** 順風丸大吉大人著 折本 全二帖

水路海程の上に在り寂著意すべきは一の盤針にて針向一たび失ふ時は託する所を知らず此圖は洋中の目的諸國の山巒港口の所在海灣地峡島嶼岬埼又錠泊の便否等きやと摸寫したるものにて船路細見記と併觀航海安穩を得る

の至大の奇圖と謂ふ可き重寶なり

海外行程記 大戸陶菴先生著 近刻 全一冊

鵬遊文章 荻田筱夫先生著 近刻 全二冊

雅言用文章 黒澤翁滿大人著 全二冊

明治新鐫 **増訂古語拾遺** 齋部宿禰廣成撰 古川躬行大人校 全一冊

古語拾遺餘鈔 尚舍先生編述 延陵先生重訂 全三冊

童蒙 **道ゝとゝへ** 淡河敬恭叔先生著 松川半山先生畫 全三冊

此書ハ説教の趣意をもつて和漢の故事を引き君臣父子夫婦兄弟朋友の間に於て仁義禮讓の備はるべき等人倫の欠くべからざる道を婦女子にも解易きやう假名がきに記し畫入なるべき書にて説教と聽聞はなるべきものといへども一度世の書を披くべきは方今の御趣意三大教の深意をも覺り得て忽ち文明の境に入るべきなり

校刻 文明千字文　大塚完齊著　全一冊

校刻 大統歌　鹽谷亞弘著　全一冊

大統歌經典餘師　全二冊

養蜡往來　加藤祐一先生編述　全一冊

此書の趣意ハ手習本ゐもきして婦女子ゐいてるまて養蚕の手つてきと口拍子ゐ覺へ常ゐ忘るゝまゝ志めん為ゐて全文を諸家發明の説ゐより各地研究の實ゐ就てゐ不之と委くし蚕生立のはゞめより四度の起卧まゆとまるまでの狼ひ方桑苗培養の手はゞき生糸製造の心得蚕紙製作の要法等舉て淺き〻〻蚕卵原紙の渡方ハ大惣代の職務ゐして外國輸出と内國用と扱ひとの異まるゝと生糸卵紙の用ひ方製作人の心得等近來追々の御布告書ゐ基き其要を摘文と和げ悉く平假名を附して見ゐ易りれゞ一讀して養蚕の秘事を知る至寶の珠書なり

四體古話千字文　全二冊　折手本四帖

楷書　菱湖巻先生遺墨輯字　行草隷三體　海石村田先生書

書ハ世ゐ泳布ゐる習字文古話千字文と高名雙き菱湖先生の楷書と集めかゝふ當今有名の大家村田先生行草隷の三體を加筆せゝを上ゐ記を体載ゐ大書なゝ且剞劂精妙と盡ゝ兩先生の筆法少しも類まゞはるかゝ肉筆に對すると同樣なそ習字手本ゐハ有益無上の珠書なり

鳳曆賀慶　鳳曆賀慶

賴山陽溪川帖　附印譜　前續二帖

近年翁ノ遺墨ヲ臨スルモノ亦ニ多シ此帖ハ楠公新田菊池三俊傑ノ勤王忠戰ヲ長編ニ作ラレ就中筆鋒ヲ剞劂氏ノ妙刀ヲ撰ミ真蹟印章ニ至ルマデ毫髮ノ違ナク肉書ヲ見ル如ク摹刻シタレバ翁ノ書ヲ愛慕シ玩ハン諸君子ノ机上ヲ闕ベカラザルノ珠帖ナリ

米法千字文　山陽賴先生書　全一帖

酒人十詠帖　筱崎小竹先生書　全一帖

新令字解　荻田嘯著　全一冊

布令字辨　松旭知足輯　自初編至七編

題字畫引 **增補新令字解**　同著　全一冊

增補布令字辨　荻田筱夫著　全一冊

大全漢語解　岩井久真輯　全一冊

名聚字叢　同著　全一冊

諸國弘通書肆

東京　須原屋茂兵衛
同　山城屋佐兵衛
同　小林新兵衛
同　和泉屋市兵衛
同　和泉屋吉兵衛
同　岡田屋嘉七
同　萬屋忠藏
同　山城屋政吉
同　出雲寺萬次郎
同　和泉屋金右衛門
同　須原屋伊八

東京　鴈金屋清吉
同　京都村上出店
同　鈴木喜右衛門
同　槻屋喜兵衛
同　大坂屋藤助
同　屋龜次郎
同　近江屋岩次郎
同　若林喜兵衛
同　近江屋半七
同　長門屋龜七
同　河内屋文助

西京
同　菱屋孫兵衛
同　吉野屋仁兵衛
同　吉野屋甚助
同　錢屋總四郎
同　田中屋治兵衛
同　蕎屋宗八
同　勝村治右衛門
同　堺屋仁兵衛
同　堺屋九兵衛
同　出雲寺文治郎
同　田中屋專助
同　須原屋平左衛門
同　村上勘兵衛

駿州静岡　本屋市藏
遠州濱松　伊勢屋太右衛門
勢州津　山形屋傳右衛門
同　篠田伊十郎
同　山田山崎與三兵衛
同　松坂本屋嘉助
同　桑名糀屋傳四郎
美濃大垣　本屋利兵衛
江州大津　本屋宗治郎
三州岡崎　加藤利兵衛
甲州府中　内藤傳右衛門
越前福井　岡崎佐喜助
同　二文字屋安兵衛

同　永田調兵衛
同　石田忠兵衛
同　丁子屋源次郎
同　北村四郎兵衛
尾州名古屋
同　永樂屋東四郎
同　菱屋藤兵衛
同　菱屋平兵衛
同　萬屋東平
同　美濃屋伊六
同　美濃屋文治郎
同　文敎堂保兵衛
同　美濃屋代助
同　永樂屋正兵衛

越前敦賀　本郷善七
加州金澤　近岡屋太兵衛
佐州羽茂　山本屋與八郎
紀州日高　紀小竹屋佐兵衛
同　菱屋藤次郎
同　若山坂本屋大二郎
南都　油屋儀八
同　後藤輯
同　中澤治兵衛
伯州倉吉　山本屋弥一郎
播州姫路　灰屋輔二
同　灰屋長平
同　灰屋庄八

阿州德島　天滿屋武兵衛
同　紀伊國屋三右衛門
讃州金比羅　柏屋仲助
同　寶屋小七郎
豫州大洲　名田屋元吉
雲州豐岡　由利安助
同　出石　蘆田歸一
備前岡山　勢能屋源米
備中倉敷　林源十郎
同　井原　萩田元治郎
同　高梁　加島屋保之助
同　玉島　大村屋文藏
備後福山　笹屋喜兵衛

藝州廣嶋　田邊屋眞六
同　井筒屋勝次郎
長州下之關　書籍會社
防州山口　山城屋彦八
同　德山　淺田屋孫兵衛
同　萬福屋要藏
薩州鹿兒島　青木泰助
泉州堺　北村佐平
同　河内屋久三郎
播州龍野　平井六郎兵衛
同　國岡庄司伊平治
大阪安土町　書林會社
同　本町　書籍會社

明治六酉年四月官許
同　九月發兌

著述　加藤祐一

藤迺家藏版

藤迺家藏

弘通　大坂心齊橋通北久太郎町
書肆　積玉圖　柳原喜兵衛